

怪物としての革命期のロシア

—*Under Western Eyes* における時代とイデオロギー—

今川京子

Abstract From the end of the 19th-century to the beginning of the 20th-century, contradictions of modernization reached their limits, and authority disappears, one after another. As revolutionary social phenomena became to be seen as the movement of the times, Russia, in particular, on the eve of the Russian revolution was a hotbed of terrorism. Violent confrontation was spreading between the revolutionary forces and government authorities, a dictatorship, so the impact this Russian revolution gave to Europe was immensely intense. It is no exaggeration to say that the Russian revolution was a social phenomenon, one that foretold the arrival an unprecedented world war. Joseph Conrad (1857-1924) wrote *Under Western Eyes* (1911) which sublimated the world and historical situation. This work has become a political novel that is closer to the empty spiritual realities that both authoritarianism and utopian revolutionism encompasses. Conrad found in Russia the source of incredible power that expands, capturing both minds and souls in its ideas and vision. This article describes how Conrad described the land of Russia as an image of an ape-like, cannibal "monster," one that symbolizes the times and reflects it in *Under Western Eyes*. Conrad's viewpoint captured contemporary Russia as a kind of Leviathan (Leviathan). Russia was one that reflected as changing the mood of the era. While Russia was identified a destructive power, it was also seen as a monster that fascinated those in the 20th century. In the Western world where freedom of thought and beliefs along with political freedom were guaranteed, the ideas of communism represented something entirely else. In this paper, the present writer will demonstrate that Conrad has used Russia as a metaphor, one that symbolizes an era through which the fate of Razumov of *Under Western Eyes* is best understood as a topography. This map can help us to better visualize the falsehood of the ideological struggle leading to the world war.

序論

ロシアとスイスのジュネーヴを舞台に展開する *Under Western Eyes* (1911)は、ある意味コンラッドの自伝的テーマを扱った小説である。この小説ではロシアそのものが、また革命に動揺する当時の世界の心理構造そのものが、戦争の時代の到来とも言える 20 世紀という時代の申し子、「怪物／怪物性」として描き出される。別言すれば、当時の世界に重く垂れ込めていた猜疑に満ちた空気が巨大な怪物として君臨し、不可抗力の力を発揮しているのである。

本稿では *Under Western Eyes* の舞台の一つとなるロシアというトポスに付与されている「怪物」的表象に注目する。この表象を通じて、コンラッドがロシア革命に戦慄する世界の動きを捉えながら、その動きのなかに既に世界大戦に通じる虚偽性に満ちたイデオロギー闘争の予兆を読み取っていたことを論証していく。

個人的視点の徹底した排除を強調するコンラッドの姿勢は、逆に本作品がどれほど彼自身の原点に回帰して書き記されたものであるかを物語っている。コンラッドの出生地ポーランドは 1772 年、1793 年、1795 年の三度に亘ってロシア、プロシア、オーストリアによって分割、支配され、第一次世界大戦の終了までは国家として消滅していた。また、彼が育った地域はロシアの支配下にあり、その抑圧・暴力的支配に慄いたコンラッドの記憶こそが、政治的イデオロギーの二枚舌的構造に着目しつつ、善悪の基準が喪失したロシアという国を、「怪物」というモチーフで表現する、という着想の源泉となっている。

1901 年にナロードニキの流れをくんで結成された社会革命党（エス・エル）に属する革命家をモデルにし、時代設定はロシア革命の発端とされる 1905 年の「血の日曜日」直前の騒然たる時代にターゲットを絞ったのが *Under Western Eyes* である。コンラッドは独裁主義とユートピア的革命主義との双方に共通する、浅薄かつ虚偽に満ちた精神に迫るため、二重スパイを設定した。この二重スパイという鏡越しに、時代的病理とも言える精神的腐敗や麻痺状態を暴きだし、反転した世界の多重構造を究明しようとしたのである。

I. 時代の破壊的要素

ロシア語の *razum* 「理性」に由来する名前を持つラズーモフを通して、読者は19世紀後半から20世紀初頭にかけて世界を揺るがした狂騒状態と、感覚的麻痺に晒されて受動的に生きることを選択せざるをえない忌まわしさ、その恐怖を突きつけられる。*Under Western Eyes* が時代を読み解く予言的作品だとしてジェレミー・ホーソンは、コンラッドがウィリアム・ブラックウッドに宛てた手紙を参照しながら次のように解説する。

Writing to William Blackwood on 31 May 1902, in a letter that presents a detailed apology for his writing, Joseph Conrad insisted: 'I am modern'. The modernity of *Under Western Eyes*—published nine years after the letter to Blackwood was written—can be illustrated in brief by means of a few cliché of recent literary theory: the surveillance society; power-knowledge; panopticism; the gaze. (*Under Western Eyes*, xxix-xxx)

小説に登場するロシアは専制と革命、二つのイデオロギーの闘争関係に引き裂かれた存在で、国自体が暴走する力の源と化している。恐怖と死が蔓延るグロテスクなトポスである。この構図のなかで「怪物／怪物性」の証たるプロタゴニストは時代、そしてロシアの地である。専制と革命、この二極に熱狂し、暴走する力に恐怖しつつも、どこか陶醉している世界自体が、既に一種のカーニヴァルとして成立している。このような状況のなかでは、人は押並べて悪漢か愚者、または愚者の仮面をつけた悪漢である道化の何れかとして存在するのみである。それを立証しているのが独裁権力の支持者たちの姿であり、抑圧的恐怖を介して一人間を道具にする彼らの姿勢であり、革命支持者たちの狂気じみた思想の過激性とその盲目的な耽溺ぶり、自己欺瞞ぶりを批判的に描くコンラッドの筆致である。この点に関して F. R. カールは主要人物の愚かしさについて言及し、ラズーモフについては次のように考察する。

Everyone literally becomes a fool. [...] The biggest fool of all is of course Razumov himself, who must play out the game with deadly seriousness, while realizing, as he communes with Rousseau, that he is dealing with dangling

puppets in matters of life and death. This is the stuff of Conrad's irony, and it is attained here succinctly through a structural framework. (Karl 221-22)

小説中に登場する人物が皆、道化的役割を担っている、という F. R. カールのこの鋭い指摘は、革命期のロシアがカーニヴァルの反世界として作中に存在していることを裏付ける。また、コンラッドはこの小説を執筆している最中に既に来るべき全体主義のおぞましい時代をも幻視していたようにも思われる。それを仄めかす場面が、二重スパイという役目を拒否して部屋を退出しようとするラズーモフに対してミクーリンが問いかける‘Where to?’(227)というセリフであり、その問いが示唆するラズーモフの窮状である。この点についてジェレミー・ホーソンは次のように論じている。

What is revolutionary about Conrad's insight in this novel is the understanding that in the modernity of the late nineteenth and early twentieth centuries there is no longer a protected realm of the private, a place to which the individual can retreat—whether this place is constituted topographically, politically, ideologically, or psychologically. [...] But in the world of *Under Western Eyes* there is, literally, no hiding place, whether in a great city or even abroad. (*Under Western Eyes*, xiv-xv)

作中、他者の姿や物腰が与える視覚的情報、印象に欺かれない者はいない、という設定からも、19世紀後半から20世紀初頭の時代的特質として、緊迫した逃げ場のない感覚をコンラッドがひしひしと肌で感じ取っていたことが明らかである。

II. イデオロギーの「怪物／怪物性」

20世紀を象徴する怪物の実態を共産主義という思想の中に見出したマニフェストとして有名なのが、カール・マルクスの『共産主義者宣言』(1848)である。マルクスは封建主義体制が瓦解、崩壊しつつある転換期に立会い、時代の変化及び人々の意識の変化をいち早く察知した。そして共産主義思想が、20世紀という時代を牽引する原動力として機能することを見抜いたのである。

妖怪がヨーロッパに出没する。共産主義という妖怪が。[.....] 共産主義はいまやヨーロッパのすべての強国から一つの力として認められているということ。共産主義がその考え方、その目的、その方針を全世界に向かって明らかにし、「共産主義」妖怪伝説に対して、党みずからの宣言を対置する、いまがまさに絶好の機会であるということ。(マルクス 4-5)

元々、聖書に登場する怪物レ비아タンは人に取り憑くことができ、大嘘つきだと説明されている。これは革命期という一時代に決まって顕現する特質である。革命を煽動する人間像や革命志向が時代のモードの如き空気に包まれた社会の混沌ぶりは、コンラッドとしばしば比較されるドストエフスキーも『悪霊』のなかで「取り憑く」もしくは「取り憑かれる」恐怖と焦燥感として作品世界に反映させている。

ロシア革命と怪物というキーワードで史実を概観すると、実在の人物としては帝政ロシアの腐敗を具象する怪僧ラスプーチンや、社会主義一党独裁体制を敷いた怪物レーニン、大規模な粛清で人々を恐怖に陥れたスターリンなどが挙げられる。20世紀の怪物的思想、共産主義が引き金となって世界が経験することになるエゴイズムの剥き出し、膨張し切った時代—ロシア革命から第一次世界大戦、スペイン内戦そして第二次世界大戦へ至るカタストロフィー—についてコンラッドはエッセイ‘Autocracy and War’(1905)のなかでこう予言している。

The nineteenth century began with wars which were the issue of a corrupted revolution. It may be said that the twentieth begins with a war which is like the explosive ferment of a moral grave, whence may yet emerge a new political organism to take the place of a gigantic and dreaded phantom. (86)

これは20世紀という時代を、コンラッドがどれほど破壊的な怪物性という属性で捉えていたかを如実に示す。イデオロギーの怪物化が招いた一連のコミュニタス—独裁政治と革命、反革命、共産主義とファシズム、スペイン内戦、二度に渡る世界戦争とホロコースト、ベトナム戦争、冷戦、湾岸戦争—がその実証である。改革を唱える側も改革される側も、革命を与え

る側も与えられる側も、つまりは体制側、反体制側の双方に「怪物／怪物性」のスピリットは息づいている。権力を振りかざそうとする者の唱える正義やモラルには真理などというものは皆無であり、代わりにあるのは肥大化した我欲と欺瞞のみ、ということコンラッドは明らかにしている。警察や政治権力、国家権力そして革命勢力の歪んだ姿を通して、コンラッドは政治や組織といったシステムそのもののなかにカニバリズム的怪物の姿を幻視したに相違ない。

この視座から今一度 *Under Western Eyes* に描出される肥大化したイデオロギーの暴走する時代と、「怪物／怪物性」との関係性を探ると、イデオロギーに支配され、国家や、歪んだ理想の踏み台にされ、食いものにされ、盲目状態に陥った人間の精神世界とその恐慌状態が顕現する。

III. ロシアの表象—「怪物」と影

専制政治と、それを脅かす革命活動。両者は対極に位置しながらも、その構造の核心部は同じである。愚昧、自己欺瞞、虚偽また猜疑心と怒り、無慈悲さを特徴とし、過度の激情で支配する。コンラッドは両勢力の根幹に共通したグロテスクに肥大化し歪曲したイデオロギーのおぞましさを、その源泉としてのロシアの地を舞台に描き出す。コンラッドにとって、ロシアとは実在としての怪物であり、悪霊であり、魔神であった。この認識は‘Autocracy and War’で彼がロシアを形容する際に用いる一連の比喩‘the ghost’, ‘a ravenous ghoul’, ‘a blind Djinn’, ‘the Old Man of the Sea’, ‘phantom’, ‘the monster’などを見ても明らかである。

ラズーモフが唯一‘the true spirit of destructive revolution’ (192)と見做す女性革命家ソフィア・アントノヴナとの会話のなかで、揺籃になぞらえられたロシアは、まさに種々様々な怪物を生み出す存在として語られる。ソフィアの言葉を見てみよう。‘One lies there[Russia] lapped up in evils, watched over by beings that are worse than ogres, ghouls, and vampires. They must be driven away, destroyed utterly’ (187). 社会革命とは熱狂的幻想に過ぎず、実体を持たないながらもその幻想に人々は自らの情熱の捌け口を求め、革命という巨大な暗黒の影の下、全ての存在が呑みつくされてしまう。そんなヴィジョンを呼び起こすデーモニックな怪物の姿が、凍てつくロシアの広

大な大地を舞台に立ち現れる。‘[W]as not all secret revolutionary action based upon folly, self-deception, and lies?’ (61)と革命運動そのものに批判的だったラズーモフは、革命へと突き動かされる人間精神の根底に‘strong individualism’ (194)を認識する。極端に美化し理想化された革命という理念の背後に蠢く人間精神の脆弱さを、ラズーモフが認識する姿を通して、コンラッドは人間に内在する自己欺瞞的精神性を強調する。そのことを示す一文が‘the invincible nature of human error, a glimpse into the utmost depths of self-deception’(208)である。

「怪物／怪物性」を育む母胎としてのロシアの地を舞台に、そこで展開するグロテスクな狂乱ぶりを掬い上げ、その無意味さを強調することでコンラッドは 20 世紀初頭という時点で居ながら、先に控えているであろう闘争の時代を解読する。

As if anything could be changed! In this world of men nothing can be changed—neither happiness nor misery. They can only be displaced at the cost of corrupted consciences and broken lives—a futile game for arrogant philosophers and sanguinary triflers. (192)

このラズーモフのディストピア的な内省は、コンラッドが同時代を支配していた革命という気運を、いかさまじみた胡散臭いものと捉えていたことを物語る。また、コンラッドが‘Autocracy and War’で行った 20 世紀という時代分析、‘[i]t may be said that the twentieth [century] begins with a war which is like the explosive ferment of a moral grave, whence may yet emerge a new political organism to take the place of a gigantic and dreaded phantom’ (1921: 86)と共振している。ラズーモフのように革命という理不尽な現代的暴力による打撃を受けた者を襲う眩暈のような感覚と苦々しさを代弁するのが以下の数行である。

Razumov for a moment felt an unnamed and despairing dread, mingled with an odious sense of humiliation. Was it possible that he no longer belonged to himself? This was damnable. But why not simply keep on as before? (222)

革命は、確実にその勢力圏を拡大し、直接間接を問わずその影響下に人々を巻き込み、侵食していく。革命の持つ現代的暴力の理不尽さ、不条理さを指し示すのが、ジーマニッチ自殺の報を受けたラズーモフの反応と見解である。

He felt pity for Ziemianitch, a large neutral pity, such as one may feel for an unconscious multitude, a great people seen from above—like a community of crawling ants working out its destiny But there was no tragedy there. This was a comedy of errors. It was as if the devil himself were playing a game with all of them in turn. First with him[Razumov] then with Ziemianitch, then with those revolutionists. The devil's own game this. (209)

気まぐれな遊戯の一環として無作為に標的を選び、確実に打ち負かしていく‘devil's own game’に喩えることで、人間が肥大したイデオロギーを振りかざし、共食いの行為に踏み出す時代の到来を、コンラッドは予言したのである。この認識は、既に第一部においても明らかにされている。それはラズーモフがミクーリン顧問官と対峙した際のラズーモフのセリフに示される。

But I[Razumov] protest against this comedy of persecution. The whole affair is becoming too comical altogether for my taste. A comedy of errors, phantoms, and suspicions. It's positively indecent. . . . (73)

まさにカーニヴァルの狂騒と共食いのイデオロギーの衝突音を髣髴させるのが、例えば陰謀家たちの腹心の友で黒幕的権力の掌握者とされるジュリアス・ラスパラの独善的思想と扇動的セリフに示されている。

Any subject could be treated in the right spirit, and for the ends of social revolution...“We must educate, educate everybody—develop the great thought of absolute liberty and of revolutionary justice.” (211)

ラスパラのセリフを介して痛烈に認識されるのは、正義や自由というイデオロギーがその実、どれほど不透明であり、その核心部が時代という文脈

に影響を受けやすい脆弱な存在であるか、という事実である。自己目的のためのイデオロギーの正当化、このコンセプトこそがコンラッドの目に映った革命の実体であり、世界内情勢だった。このコンラッドの悲観的見解を証明するのが、ラズーモフとミクーリンの対談で露呈する人間の偽善的かつ欺瞞的な性質である。

With what greater latitude, then, should we appraise the exact shade of mere mortal man, with his many passions and his miserable ingenuity in error, always dazzled by the base glitter of mixed motives, everlastingly betrayed by a short-sighted wisdom. (224)

コンラッドにとって、革命とはまさに実在としての怪物である。革命が怪物であるのは、革命という運動と接触したとき、個人は国家の駒となり、人間の存在は完膚なきまでに破滅させられ、一切が崩壊するからである。革命のカニバリズムの残酷さを、コンラッドは独裁国家のそれと重ねあわせて、不気味な怪物の姿に託し、第四部に挿入している。それが、この物語の数年後に起きた事件として紹介されているミクーリン顧問官のその後である。陰謀の発覚によりミクーリン顧問官が失脚したこと、そして国家裁判にかけられ、やがて死刑に処せられたという後日談である。

And in the stir of vaguely seen monstrosities, in that momentary, mysterious disturbance of muddy waters, Councillor Mikulin went under, dignified, with only a calm, emphatic protest of his innocence—nothing more. No disclosures damaging to a harassed autocracy, complete fidelity to the secrets of the miserable arcana imperil deposited in his patriotic breast, a display of bureaucratic stoicism in a Russian official's ineradicable, almost sublime contempt for truth; stoicism of silence understood only by the very few of the initiated, and not without a certain cynical grandeur of self-sacrifice on the part of a sybarite. For the terribly heavy sentence turned Councillor Mikulin civilly into a corpse, and actually into something very much like a common convict. (225)

この一連のパラグラフは、国家権力の中枢部に座し、それに仕える人間を

も躊躇なく貪り喰う怪物の姿を伝えている。このミクーリン顧問官の悲劇的失脚については次のようなコメントが挿入されている。

It seems that the savage autocracy, any more than the divine democracy, does not limit its diet exclusively to the bodies of its enemies. It devours its friends and servants as well. (225)

このようなカニバリズム的な怪物精神を胚胎し、世界を震撼とさせているロシアの大地そのものも、コンラッドにとっては象徴的かつ破壊的な黙示録的舞台として君臨し、実在としての怪物性を発揮し、その影響下に全てを支配しようという欲望にいきり立つパンデモニアム的トポスとして、彼の心に取り憑いて片時も消えない存在だったのである。

「怪物／怪物性」の具象として、また全てのもを侵食する巨大な影としてロシアは象徴的役割を負っている。*Under Western Eyes* とは西洋人の眼の下に晒されるロシアの影であり、怪物としてのロシアの影に侵食されつつある西洋世界という反転した認識を同時に迫るのである。エッセイで表明したロシア観を小説という枠組み越しに、コンラッドは全世界の置かれている状況、迫りくる不協和音の実体を総体的に捉えようとする。独裁体制の高圧的支配と、暴力革命により現状の破壊を目指す革命勢力の間で分裂した社会情勢の只中で結晶化して浮かび上がるヴィジョンを、コンラッドは捕まえようというのである。

ロシアという怪物が投げかける巨大な影の存在は、舞台がスイスのジュネーヴという中立国家に移行する第二部以降、深刻さを増し、侵食していくペースも加速化していくことになる。ジュネーヴを舞台にして、コンラッドはロシアの影の下に次第に呑み込まれていくヨーロッパの姿を描き出す。イギリス人老語学教師の目を通して、コンラッドはロシアを母胎とする現代の黙示録が、世界をその影の下に覆い隠していく緊迫感に迫っていく。

結論—「怪物」としてのロシア

興味深いことに、コンラッドは Author's Note のなかで *Under Western Eyes*

における「怪物／怪物性」に関して登場人物に対する批評と併せて次のように言明する。

The sanguinary futility of the crimes and the sacrifices seething in that amorphous mass envelops and crushes him[Razumov]. But I don't think that in his distraction he is ever monstrous. Nobody is exhibited as a monster here—neither the simple-minded Tekla, nor the wrong-headed Sophia Antonovna. (282)

個としての「怪物／怪物性」の具象は存在しない。この小説に描かれる人物像や出来事一つひとつに直接的には「怪物」を創出してはいない、と強調するコンラッドは、しかしながらロシアそのものを描出するとき、幾度も怪物や妖怪や魔女といった忌まわしいイメージを用いている。こうすることで、ロシアの状況、国家としてのロシアそのものをグロテスクでカニバリズム的な「怪物／怪物性」としてコンラッドは考察しているのである。彼のこの解釈は、以下の宣言からも明白である。

The most terrifying reflection (I am speaking now for myself) is that all these people are not the product of the exceptional but of the general—of the normality of their place, and time, and race. The ferocity and imbecility of an autocratic rule rejecting all legality and, in fact, basing itself upon complete moral anarchism provokes the no less imbecile and atrocious answer of a purely Utopian revolutionism encompassing destruction by the first means to hand, in the strange conviction that a fundamental change of hearts must follow the downfall of any given human institutions. These people are unable to see that all they can effect is merely a change of names. The oppressors and the oppressed are all Russians together; and the world is brought once more face to face with the truth of the saying that the tiger cannot change his stripes nor the leopard his spots. (282-83)

この‘Author’s Note’は第一次世界大戦終結後間もない1920年に書かれたことを考え合わせても、*Under Western Eyes* が出版された1911年当時に、コンラッドが作品中でいち早くロシアの姿を「怪物／怪物性」という象徴を

介して描き、イデオロギーに人が翻弄される時代の到来を予期し、幻視していたかが分かる。先にも指摘したように、‘Autocracy and War’では一貫してロシアを ‘the ghost’, ‘a ravenous ghoul’, ‘a blind Djinn’, ‘the Old Man of the Sea’, ‘the monster’ といったイメージで掌握し、‘[t]his dreaded and strange apparition’ (1921: 89)や‘the Russian phantom, part Ghoul, part Djinn, part Old Man of the Sea’ (113)などと表象していたコンラッドは、*Under Western Eyes* においてカニバリスティックな黙示録的「怪物」としてロシア像を完成させた。¹ 1905年当時にコンラッドが‘[i]t may be said that the twentieth [century] begins with a war which is like the explosive ferment of a moral grave, whence may yet emerge a new political organism to take the place of a gigantic and dreaded phantom’ (1921: 86)と宣言していたように、*Under Western Eyes* は20世紀の歩みそのものである。そして、*Under Western Eyes* における怪物としてのロシアは、世界大戦に通じるイデオロギー闘争の虚偽性をヴィジュアル化するトポグラフィーとして君臨しているのである。

注

¹ F. R. カールはコンラッドにとってのロシアを次のように分析する。‘Russia represented to him[Conrad] the very violence and spiritual chaos which undermined his sense of moral values or ethical procedures. Even *Under Western Eyes* had not settled Conrad’s ambivalence, for his view of Russia there was finally resolved not in the home country but in Geneva.’ (F. R. Karl, 796).

参考文献

Primary Sources

Conrad, Joseph. *Notes on Life and Letters*. London: J. M. Dent and Sons, 1921.

———. *Under Western Eyes*. Ed. Jeremy Hawthorn. Oxford: Oxford UP, 2008.

Secondary Sources

Berthoud, Jacques. *Joseph Conrad: The Major Phase*. Cambridge: Cambridge UP, 1978.

Hawthorn, Jeremy. ‘Introduction.’ *Under Western Eyes*. Ed. Jeremy Hawthorn. Oxford: Oxford UP, 2008.

Houen, Alex. *Terrorism and Modern Literature, from Joseph Conrad to Ciaran*

- Carson. Oxford: Oxford UP, 2002.
- Howe, Irving. *Politics and the Novel*. London: Stevens and Sons, 1957.
- Karl, Frederick R., *A Reader's Guide to Joseph Conrad*. New York: Noonday, 1960.
- . *Joseph Conrad: The Three Lives*. New York: Faber and Faber, 1979.
- Sherry, Norman ed. *Conrad's Western World*. London: Cambridge UP, 1971.
- . *Joseph Conrad: A Commemoration*. London: Macmillan, 1976.
- . *Conrad: The Critical Heritage*. London: Routledge and Kegan Paul, 1973.
- Simmons, Allan H. ed. *Joseph Conrad in Context*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Stape, J. H. ed. *The Cambridge Companion to Joseph Conrad*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Watt, Ian. *Conrad in the Nineteenth Century*. California: University of California Press, 1981.
- 近藤いね子編『小説と社会』研究社、1973年。
- 下斗米伸夫『図説—ソ連の歴史』河出書房新社、2011年。
- 武田ちあき『コンラッド—人と文学』勉誠出版、2005年。
- ドストエフスキー、フョードル・ミハイロヴィッチ『悪霊』、亀山郁夫訳、全三巻、光文社古典新訳文庫、2010-11年。
- 土肥恒之『図説—光と闇の200年』河出書房新社、2009年。
- 藤倉孝純『悪霊論—自我の崩壊過程』、作品社、2002年。
- 松田道雄編『ドキュメント現代史—ロシア革命』平凡社、1972年。
- マルクス、カール『共産主義者宣言』金塚貞文訳、太田出版、1993年。
- 吉岡栄一『亡命者ジョウゼフ・コンラッドの世界—コンラッドの中・短編小説論』南雲堂フェニックス、2002年。
- 吉田徹夫『ジョウゼフ・コンラッドの世界—翼の折れた鳥』開文社出版、1980年。

(いまがわ きょうこ 九州工業大学 非常勤講師)